

吉田健一

これは**本郷信楽町**に住んでゐた頃の話である。當時は帝大の前を電車が電車も帝大も戦後まであることはあつたのだからそれだけでは時代を示しれならば日本で**戦前**だとか**戦後**だとか言ふやうなことになるとは誰も夢に代といふことにして置かうか。**兎に角**帝大と電車が出たのだからこれが文ないこと位は解る筈である。どうもその頃は**その電車が通つてゐる道も砂**する。それだから春になつて**温い風**が吹き始めると**埃が立ち**、その爲に**電**店先の本が**ざらざら**した。尤もさういふ商賣をその頃してゐた譯ではない**古本屋**を覗いて見るといふことも偶にはしたといふだけのこと、それで

東京の昔

東京の昔

中公文庫

©1976

昭和五十一年四月二十五日印刷
昭和五十一年五月十日発行

著者 吉田健一

発行者 高梨 茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一番地

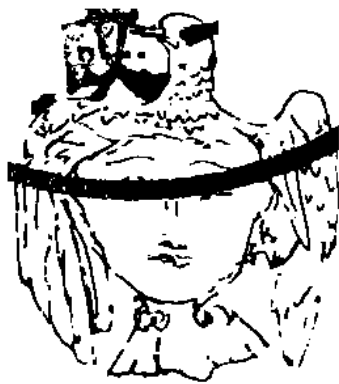
振替東京二一三四

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

東京の昔

吉田健一著



中央公論社

表紙・扉 白井晟一

東京の昔

これは本郷信楽町に住んでいた頃の話である。当時は帝大の前を電車が走っていたと書いても電車も帝大も戦後まであることはあったのだからそれだけでは時代を示したことになる。それならば日本で戦前だとか戦後だとか言うようなことになるとは誰も夢にも思っていなかった時代ということにして置こうか。兎に角帝大と電車が出たのだからこれが文久三年と言った大昔でないこと位は解る筈である。どうもその頃はその電車が通っている道も砂利道だったような気がする。それだから春になって温い風が吹き始めると埃が立ち、その為に電車通りに並ぶ古本屋の店先の本がざらざらした。尤もそういう商売をその頃していた訳ではない。ただ学生時代の癖で古本屋を覗いて見るといふことも偶にはしたというだけのこと、それでは何をして暮していたかということになるとこれが実はそう簡単に説明出来ることではないのである。別に昔の時代はよかったというのでなくて確実にそういうことが考えられるのは例えばフランス革命の後で十八世紀のヨーロッパを振り返るとか安祿山の乱の最中に玄宗皇帝が長安に都していた盛時を回想するとかいう特定の場合に限られたことであるが帝大の前を電車が春風に砂埃を上げて走っていた頃に就て一つだけ言えることは生活が楽だったということである。

當時は一円を百で割った一銭というものがあってこれが今の十円銅貨の倍はある大きさの銅貨の形で人から人へと手渡されて一円はお札だった。その上に五円札、十円札というのがあって十円札が猪と呼ばれていたのは覚えていたのは一円札の別名が何だったかはもう思い出せない。それよりも五十銭銀貨がギザーでそのことが記憶に残っているのはこの方が手に入れ易くて結構使用があつた為と思われる。そのことから暮しの話に戻って例えばその頃は横浜までコーヒの粉を仕入れに行つてこれを東京の懇意な喫茶店に卸して廻つても一日三、四円、どうかすると五、六円にもなつた。それが盛り蕎麦が七銭の時代である。又例えば中古の自転車を新品に仕立てることが兎に角その頃は出来もすれば商売にもなつてどこかで中古を一台手に入れて多少その方のことに就て心得があり、友達が自転車屋をやっているのにその道具を借りれば余り手間を掛けずに当時の製品で言えば何年か前のギヤMが今年のギヤMに早変わりして自転車を欲しがっているものに恩を着せて売り付ければ中古に払った値段の倍にはなつた。

要するにどうにでもこうにでも暮しは立ってその一時の稼ぎで何日でも、或は運がよければ何カ月でも懐手をして生きて行けたから定職がないことに自然なつたが初めに書いた通り住所不定ではなかつた。今はその町の辺がどうなつたか知らない。もし十一階建ての高層住宅の隣に十七階建ての高層住宅が建つていてもこの頃のことだからと思つて諦めることにする。併しその頃の本郷は木が多くて静かな町だった。そして表通りの一部は或は舗装してあつたかも知れなくても路次に入れば砂利道であるのは勿論のことこの砂利道というのも今では懐古の情を込めて説明

するに価する。これはその言葉からも察せられるように砂利を敷いた道であるが、それは敷いた当座のことであつてそのうちにその上を行き来する人間が砂利を下の土の中にその回数からすれば丹念にとり具合に踏み込んで砂利は土に没し、ただの泥道になつたのが暫く続くと又そこに砂利が敷かれてそれが又土にめり込むまでは歩き難い。

砂利が敷かれたばかりとただの泥道の中間位が砂利道の見どころである。その辺ならば道は一応平たくなつていて歩き易くてその上を懐手をして行けば天気の日にはまだ土から頭を出している砂利の灰色が土の茶色とこっちの眼には馴染みの配合をなし、それが雨の日か雨上りならば砂利も泥も妙な具合に光つて雨の道の観念を完成する。もしその辺の当時は勿論木の電信柱に自転車が立て掛けてあつたりすればそれで文句なしに雨の日の東京というものが出来上つて筆太に書いた下駄屋の立て看板とともにここは東京だという思いに人を誘わずにいなかった。それは夜泣き蕎麦の笛の音や羅宇屋の汽笛や晴れた日に空を舞う鳶と同様に東京の一部をなしていたので人口が何百万だとか東京市がいつの間にか東の京都に變つたとかいう泡沫の現象と違つてこういうものが東京であり、その為に東京が東京という町だったのでその空を舞う鳶がいなくなったのならばその代りになるものが出来ない限り今の東京は東京でもなければどこの町と呼べる程のものでもない。

併し管を巻くのは止めにして、又もう一度繰り返して言えばその頃も住所不定ではなかつた。その信楽町の家にどういふ事情で住み込むことになつたのかは余り前のことになるのでどうも思

い出せない。一つにはその頃は貸家とか貸間とかいうのが東京の人間が普通に住む場所だったのでただの気紛れからでもどこか他所の貸間、或は貸家に移りたければ好きな所を探せばよかったから何故或る町の或る家から別な町に住み替えたか一々覚えていられるものではなかった。もし必要があれば大八車を借りて荷物を載せて望みの場所まで引張って行けば大概はその辺のどこかに貸間とか貸家とか書いた札が下った家があつてそこが気に入らなければその少し先に又それがあつた。それで昔の昔の或る日、大八車を止めたのが偶然そういう貸間の札が下つていた信楽町の家の前でその部屋を見せて貰つて気に入つたのだということになりそうである。それから随分長い間そこにいた。

その場所柄からそこが学生向きの下宿だったのでいいようなものであるが家の持主のおしま婆さんが貸間の札を出した時にそれを望んでいたのかどうかは遂に聞かなかつた。これは見た所は別に婆さんという程の年でもなくて寧ろお婆さんの感じだったが、それが初めのうち名前のごとは頭になくて従つて名前で呼びもしないで付き合っているうちに近所の人達がそう呼ぶのでいつの間にかこつちも自分がいる所の女主人をおしま婆さんと考えようになつた。そのおしま婆さんがこつちのことを何と思つていたのかは解らない。これが例えば乗つた電車の車掌とか食堂で注文したものを持つて来てくれた給仕とかいうのならば互に何とも思つてもない訳である。併し長年同じ家の一間を貸して貰つていて一日のうち先ず二度は食事の世話にもなつてそれでどういう間柄になるかというようになると例えばおしま婆さんとの場合は言わば初めからどこか

気が合つて安心しているうちにもつと前から付き合っていた感じがして来て相手がそこにいるのがしまいに至極当り前なことになったというのがお互様だったのではないかという気がする。そういうこともあるのでそれが当っていないと思わせる程のことをおしま婆さんは最後までしなかつた。

湯豆腐というものがある。これを書いている今がまだ冬だからそれが頭に浮ぶのかどうか知らないが冬の晩にこつちが出掛けずにいる時はおしま婆さんがよくこれをやつて自分もこつちの部屋に来て二人で仲よく豆腐を突つついた。こういうものを二部屋に分けて作るのでは手間が掛ると思つて初めの時にこつちがおしま婆さんを部屋に呼んだように覚えてゐる。それでいてそういう時に大して話をするのでもなかつた。ただ二人の間に昆布を引いた土鍋があつて中に豆腐と鱈たらが沈み、それを掬つては薬味を利かせた醤油を付けて食べるだけでそれが湯気を立てているのが旨かつたから話をする必要もなかつた。おしま婆さんはそういう時に酒も一本付けてくれたが、そうした場合に飲むか食べるかどつちかが主になるのが普通で酒は余り上等なものではなくて豆腐は旨かつたから酒はいつもその一本で終つた。又一本だとそれが味覚を刺戟することにもなつて今でもこの調味の方法を時々用いることがある。

おしま婆さんは食事がすむとさっさと机のものを下げてこつちは又その部屋で一人になった。併し前に言つた夜泣き蕎麦の笛も聞えれば路次の向うの道を電車も通り、暫くは何の音もしなくて沈黙に浸っている思いをしている時にこういう音が聞えて来る方が車がただやたらに煩さいの

よりも遙かに都会の真中にいるという感じがする。その頃の東京は都会だった。こっちが下宿している家の女主人のことを近所の人達がおしま婆さんと呼ぶのを聞いているうちにということを書いたが、その近所の人達というのも直ぐ隣に住んでいるのでさえ何をしようという境遇の人間か解らなくて道を幾度も通つて顔を合せているうちに口を利くことにもなり、それが隣近所の付き合いに結構なつた。恐らく困っていることが解れば助け合いもしただらうと思う。併しそんなことも起らなかつた代りに何年も同じ場所にいるうちには近所の人達の中で近所付き合いよりももう少し親しくなつたのもあつた。

中古の自転車を安く手に入れて友達に自転車屋がいればその場所と道具を借りて中古を新品に仕立て直すと言つたのは仮定ではない。その自転車屋は路次から表通りに出る角にあつた。これもその町に来てから馴染みになつたのでまだ来立ての頃或る晩道に迷つて自分の家に曲る路次がどこなのかその自転車屋で聞いた所がその路次がそうなのだった。この間抜けな質問をした誼たじみでそれからは店の前を通る時にその勘さんがいれば何か挨拶を交すようになり、そういう訳でこの勘さんという友達が一人出来た。勘さんはその店の後継ぎで一人息子だったから言わばその若主人だった。こっちよりも年は十も下の感じだったが當時は若いものが子供の頃におやつにチーズを食べて育つて頭までふやけたかと思うような代物でなくて二十を越えれば一応は人並に大人の振舞いをして又それを心掛けもしていたから勘さんが若いということとは付き合ひの妨げにならなかつた。寧ろ時々その店先を借りて中古で儲けさせて貰うこと以外にも暇な折を一緒

に愉快に過せる相手が出来て有難かった。

この自転車屋という商売も今日では説明が必要かも知れない。少くとも東京では自転車屋というものを余り見なくなつていてもしあつてもそれが自動自転車とか自動三輪車とかの商売の片手間に自転車も扱つてゐるに過ぎなくてよく見なければ自転車がどこかに置いてあるとも思えない。併しこれは曾ては東京で電車に次ぐ重要な交通機関だった。その頃の東京と言へば今日の東京の日曜を思へば多少はその觀念が得られてそれもここでは歩く天国とかいうお祭騒ぎの雑沓を頭に描いてのことではない。その地獄を離れば今日でも東京の通りや路次は日曜日は車が数える程に減つて道の大部分がその表面になり、この町でもこんなことがあるのかとその異様な静寂に打たれる。併し昔はそれが毎日のことだったのでそれが東京の町であり、そういう具合だったから歩くのよりももう少し早くどこかに行きたくて電車が来るのを待つのがいやならば自転車に乗るに限る訳だった。それで自転車屋というものが繁昌して信楽町の路次から表通りに出て来た角の所にある自転車屋もその一軒だった。

今思い出して見てその若主人の勘さんにどういふ特徴があつたといふこともないようである。当時の習慣、或は文明に従つて大人として扱える極く普通並の青年でこれを真面目と称すれば又誤解が生じる。そういう真面目な人間というのが實在するものかどうか知らないがこの形容詞はそれに附帯する幾つかの条件を考えて行くとそれに該当するものが人間と思えなくなつて来て真面目だから酒を飲まなくて真面目だから煙草も吸わず、小説も読まず、芝居も見ず、外国に行け

ばそれが全くただ見聞を広くする為というようなのは人間ではない。勘さんはそんな朴念仁ではなかったが同時にそうでないとなると直ぐに聯想されるのが今日の仕来りであるただもう浮ついていて週刊誌の表紙に持って来いである種類の腰抜けでもなかった。この頃は普通の一人の若い男に就て書くのに随分手間が掛るものである。勘さんはそういう極めて普通の、或はその頃は普通に見られていた青年の一人だった。

こつちが立っている所がこつちが探している路次の入り口であることを教えて貰った翌日の午後には横浜に行く用事か何かで又そこを通った時に勘さんがいて、

「家は見付かりましたか、」と聞いたから、「実はそこに住んでいるんです、」と答えざるを得なかった。そうすると勘さんが笑って、

「最近越していらしたんですね、」と言った。それが我々が親しげに口を利いた最初でその時はその位のことと別れたがそれが合い性というものなのか、その前を通る時に勘さんが店に居ることをそれからは何となく心待ちするようになった。その状態からもっとと実質的に付き合うことになるまでは一足である。それもやはりその頃の或る晩本郷の辺りには、尤もこれは本郷に限ったことでなかったが本郷にも幾らもあつたおでん屋の一軒に入つて行くと勘さんが一人で飲んでいたので話は早かった。これも冬のことだったように思う。このおでんというのは冬食べるものと決っている訳でなくてそれでおでん屋というのがやって行けたことにもなるが冬の味が格別であるのは説明するまでもないことで季節が変わるとどうも足は寧ろ鮎屋や蕎麦屋に向つた。

説明するまでもないことと言つてもおでんやおでん屋とかいうものに就ても今の東京では多少の説明が必要なのだろうか。この頃東京の町を歩いていておでん屋というものを見たことがないが、そう何もかも説明してばかりいられない。我々が外国の小説の類を読む時に知らないことが多くてもそこに書いてあることから大体の状況を察して読み続けるのにそれ程不便を感じないのであるからそのやり方をこの場合にも適用して状況がそのまま説明になるということで話を進めたい。そのおでん屋の土間に並べられた幾つかの机の一つに向つて勘さんが飲んでいたので話が進めちも自然その反対側の腰掛けに腰を降して別に銚子を頼むことになつた。それが来るのを待つている間に勘さんが自分の盃に注いでこつちに廻してくれたことは言うまでもない。「冷えますね。」と勘さんが呟いた。その頃の東京は確かに寒かつた。最近の冬がそれ程でもないのに就ては地球全体がそうなのだと色々な説が行われているが大事なことはその頃冬になるといやでも冬ということをおぼえずにいられない位寒かつたことなのでそれでおでんも有難ければ熱燗の酒も旨かつた。そうして外に聞える凍り付いた砂利道を人が通る下駄の音も冷たそうで寒さが空から東京にのし掛つている感じだつた。勿論それだからおでん屋の店の中も寒かつた。それを温めるといふ觀念もなくしておでん屋の主人が立つている前には鍋が煮えていて温くて帳場にいるおかみさんの脇には火鉢が置いてあつたが客は酒とおでんで温ることになつていて事実それで飲んであるうちに温くなつたのだから冬の気分が薄暗い電燈の明りとともにゆっくり味えた。それは鍋から昇る湯気と匂いにも漂つていてその頃は冬というものそれ自体に匂いも手触りもあると思

つていたものだった。

「この辺は静かですね、」とこっちも銚子が来てから勘さんに注いで言った。それでそこに移って来るまでは京橋の高松町のごみごみした中に住んでいたことを今になって思い出したが別にそれはこの話と関係があることではない。そう言っただけでその高松町のような場所から越して来たものと受け取って勘さんはこの辺が静かであることに就て言葉を探した。その位の呑み込み方が出来なくて都会の人間ではない。

「兼安までは江戸のうちなんだそうですからね、」と勘さんは言った。「その江戸のうちでも外れの方だったんでしようよ。」その兼安の小間物屋だか何だかは今でもある筈である。そういうところでいいような話をしながら飲んでるのはおしま婆さんと湯豆腐を突っついていっているの位楽しかった。その店の熱燗というのは酒が通って行く喉が焼けそうな本当の熱燗で又そうしなければ飲めない程の辛口でもあったから酔うよりも先にその熱いのと酒が強烈なので却って暫くのうちには改めて目が覚める思いをする按配だった。そしてその店は前に一度来た時も気が付いたことだったが新たに一本持って来ても前の空になった銚子を下げずにいて勘さんの前にも二本そのいかついのが並んでいた。

「こうして置くと何本飲んだか解るからなんですよ、」と勘さんがその町の先輩らしく説明した。「併し気を付けないとね、この酒は酔います。」

「それでなお更何本飲んだか知って置く必要がある訳ですか。」そう言えば前に来た時も初めの

感じに似ずかなり酔ってその店から帰ったことを思い出した。これに対抗するには食べるのに限るのでおでんの方は袋にがんもに爆弾を頼んだ。この他にその頃はおでんの種に何があつただろうか。その晩もこの三つを頼んだ覚えがあるのからすればおでんの中でもこういう脂っこいものをいつも頼んでいたらしい。そのおでんも熱くて辛子も飛び切りよく利いた。それに熱燗の酒でそういうものを飲んだり食べたりしていると寒さを忘れるばかりでなくて勘さんが言った通り酔わないでいることの方も危くなつて来た。

「このお銚子で十本飲んだらどうだろう、」と勘さんに言ったその言葉遣いもぞんざいになつてゐるのに気が付いて一応は酔いを抑えた積りだつた。

「それは止して置いた方がいいでしょう、」と勘さんが言った。「ここの酒は強いんだから。これを五本と飲んだ人はいないでしょう。」それを受けて立つ気になつたのだから既にかなり酔つていたのに違いない。併しそれで直ぐにがぶ飲みを始める程まだ正気を失つてはいなくてそういうことをすれば角が立つこと位は頭の一部でだけでも分別が付いた。その代りに勘さんとそれまで通りにぼつりぼつりと話をしながらゆつくり飲んでゐるうちに是が非でも十本の銚子を自分の前に並べる決心をして勘さんが気候のことを言えばこっちは世間の噂話をし、それを勘さんが取り上げて文明批評のようなことを始めればこの寒さで春が来るのが遅くなるかそれとも早いかという風なことに話を引き戻すうちに五本は銚子を並べる事が出来た。勘さんはこっちが考えていることを察したらしくて止めもせず、それを顔に出す程ではなくて実際に十本飲めるものかどう